一般墓の空き区画を十倍以上に活用できる
供養重視の骨壷納骨型「特許樹木葬」が急拡大！

千代石㈱（本社＝横浜市神奈川区）

今年3月より第2期分として売り出されている鎌倉材木座樹木葬墓地「月あかり」。手前にお孫さんが描いた「おじいさまとおばあさまの似顔絵」を彫刻した微笑ましいお墓も見られる

樹木葬関連のエキスパート集団、千代石㈱（河東田清八郎社長）が供養重視の視点で考案・設計した「骨壷納骨型樹木葬墓地」が快進撃を続けている。鎌倉時代の正安元（一二九九）年創建の古刹で、同社の骨壷納骨型樹木葬墓地を鎌倉市内で初めて採用した妙長寺（第四十四世・神和秀住職）を取材した。

妙長寺は、日蓮聖人の伊豆法難に際し、鎌倉出船の地に建てられた日蓮宗の寺院。日蓮聖人の弟子・日実上人による開山で、一時は檀家が大幅に減少し衰退の危機にあったが、それを再建したのが先代の塚本英憲住職だった。現在は周辺寺院のなかでも群を抜いて多い檀家数を抱えるまでになっている。

妙長寺第44世・神和秀住職

千代石の骨壷納骨型樹木葬墓地については、本誌で度々紹介し、今年二月号でも特許を取得したことを伝えたが、主な特徴をまとめると、

①骨壷のまま納骨できる（基本的に容器の移し替えや粉骨の必要がない）

②水害の多い日本の気候や地形に適した優れた排水構造を採用（昨年十二月に特許取得）

③同社オリジナルの立体型墓石を採用し、そこに家名や戒名、建之年月日などを彫刻すること で「唯一無二の石塔」となる

④墓じまい後などさまざまな形状の空き区画に対応し、長年未使用だった区画が復活する

⑤墓じまい等による離檀者（寺院からの檀家流出）を食い止め、檀家減少の歯止めとなる

――以上五点が挙げられる。

妙長寺は、この骨壷納骨型墓地構造（特許第7397515号）を採用した鎌倉材木座樹木葬墓地の第一期販売分を「星あかり」と名付けて二〇二二年春にオープンした。墓地の名称は、同寺とゆかりのある小説家・泉鏡花の短編小説『星あかり』（妙長寺での滞在生活をもとに書かれた作品で、原題は『みだれ橋』）にちなんで命名したものだ。

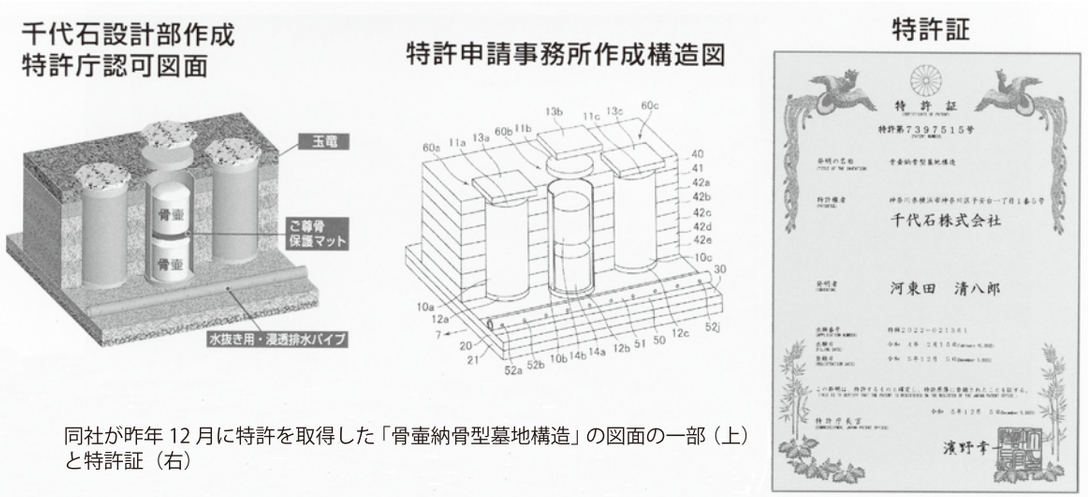
二〇二二年春にオープンした鎌倉材木座樹木葬墓地「星あかり」（第一期分）。約九ヵ月で完売となった

鎌倉市とその周辺エリアには、日蓮宗に限らず他宗の寺院も含めると、すでに数多くの樹木葬が開設されており、「ほぼ飽和状態にある」との見方もあったが、販売を開始すると、一般的な樹木葬より長い五十年という使用期限にもかかわらず、当初の予想を大幅に上回るペースで売れ続け、第一期「星あかり」は九ヵ月で完売。今年春から第二期「月あかり」を売り出しているが、やはり好調な売れ行きで、すでに二十区画が売約済みとなっている。

「千代石の河東田社長とのご縁は、同じ日蓮宗で鎌倉にあるお寺さんからのご紹介がきっかけでした。そこにも人気の庭園型樹木葬があり、その販売を担当されていたのが河東田社長でした」と神住職は説明する。

神住職が数年ほど前、そのお寺の新盆会に式衆の一人として参加すると、参列者が大勢いらして、寺観も立派に整えられて、大いに発展しているようすだった。

また檀家数が少子化等で年々減少している問題について、檀家総代（責任役員）と今後の対策を相談するなかで、「これからは新規の信徒



同社が昨年12月に特許を取得した「骨壷納骨型墓地構造」の図面の一部（上）と特許証（右）

（非檀家）を増やす必要性がある」と考えていたことに加え、承継者が途絶えた檀家の流出（離檀）を防ぐため、その受け皿となる永代供養墓を早急に整備することも急務となっていた。ちょうど本堂の建て替え時に借り入れた債務の返済が終了し、新たな事業を始めようと考えていた矢先でもあった。

これらの状況を河東田社長に説明したうえで、樹木葬の今後の見通しなどを相談すると、同社の骨壷納骨型樹木葬墓地は他社の樹木葬とまったく別モノであることがわかった。何よりも「故人の尊厳を大切にする（供養重視）」という千代石の理念が、先代住職の考えと一致していることが大きな後押しとなった。

「火葬場で荼毘（だび）に付された焼骨は、故人様とご縁の深い方から順に、二人一組で箸をもって丁寧に収骨（お骨上げ）します。その際、下半身のお骨から骨壷に収め、次に上半身、俗に『喉仏（のどぼとけ）』と呼ばれる第二頸椎（けいつい）、そして最後に頭蓋骨をのせて、生きているときと同じような並びで骨壷に収まります。そのようにお骨（尊骨）を大切に扱おうとする考えは、日本古来の埋葬法から土葬時代を経て、火葬が主流となった現代にも受け継がれているのではないでしょうか。同じ樹木葬でも、納骨時に別の容器にお骨を移し替えたり、粉骨するものもあり、『果たしてこれでよいのか』と釈然としないものがありました。しかし、骨壷のまま納骨できる千代石さんの樹木葬であれば、故人様の尊厳を守ることができ、それによりご家族やご先祖様との絆を深め、再確認することができると確信したのです」

神住職はそう説明する。

しかし、境内にまとまったスペースがなく、樹木葬に必要な用地をどう確保するかが問題であった。これに関しても「新たな土地を取得する必要はなく、空き区画などを整備すれば小規模でも大丈夫」ということで、一部の檀家さんに協力してもらい、墓じまいなどで空いた区画と合わせて四区画（九㎡）を確保した。

つまり単純計算で、一般墓の四区画からその十倍以上の契約者が共同で使用できる墓地が新たに誕生したことになる。当然、一人当たりの墓地使用料は樹木葬のほうが安いが、それに伴って発生する法要時のお布施や護持会費（管理費）なども含めトータルで考えれば、将来的に見込める収入は樹木葬のほうが多く、それによって寺院経営の安定・強化を図ることが可能になるのだ。

「檀家さんを説得し、快く承諾してもらえたのは、ひとえに妙長寺さんに対する長年の信頼と、神住職ご夫妻の人望があってこそ。檀家さんとのコミュニケーションが普段から上手くいっているからこそ無事調整できたのです」と河東田社長は補足する。

第一期の開発・設計は、千代石主導により進められたが、第二期では神住職と千代石の同寺担当・田中麗子さんに加え、住職の奥様・英子さんの意見も交えて細部のデザインや石種などを決定した。英子さんは、ガラス工芸を得意とするフランスの高級クリスタルブランド、ラリックの直営店（横浜そごう店）で店長を務めていた経歴の持ち主で、その提案に基づいて植栽の代わりに桜色の小石を墓地全体に敷き詰めたが、その結果、女性ならではの美的センスが随所に感じられるものとなり、また植栽の維持管理も最小限で済むようになったという。

墓石のかたちは、両墓地ともに同じデザインの立体型墓石で統一されている。国産材（真壁石と万成石）を含む六つの石種が用意されており、家名や戒名、建之年月日などはもちろん、好きな言葉や花模様などを彫刻することができる。第二期・月あかりには、お孫さんが描いた「おじいさまとおばあさまの似顔絵」をそのまま彫刻した微笑ましいお墓もあり、心温まる空間となっていた。

第２期・月あかりの隣接地につくられた檀家専用の区画

また第二期・月あかりと隣接する場所に、無縁墳墓や改葬の受け皿として利用できる檀家専用の区画（骨壷納骨三区画と合葬用八区画）を新たに用意した。ここだけで百霊ほど納骨できる。これにより離檀者の流出を防ぐことができ、お寺と何世代にもわたってお付き合いしてきた檀家の方々とご縁が切れることもなくなった。

大人数の法要で多数の塔婆が上げられる供養スペースも新設されている

さらに「故人様のためにできる一番大きい功徳がお塔婆供養である」として、第一期・星あかりの前には、大人数での法要を想定して、日蓮宗のお題目「南無妙法蓮華経」が書かれた石塔の前で多数の塔婆が上げられる両墓地共用の供養スペースも新設された。

「地元で代々自営業を営んでこられた方や新たな事業で成功を収められた方など、男女問わず、鎌倉の文化や歴史を愛する多くの方々にご契約いただいております。またその方を通じて、ご家族や兄弟姉妹、友人などに紹介が広がっていくケースが増えています」と担当の田中さんは話す。

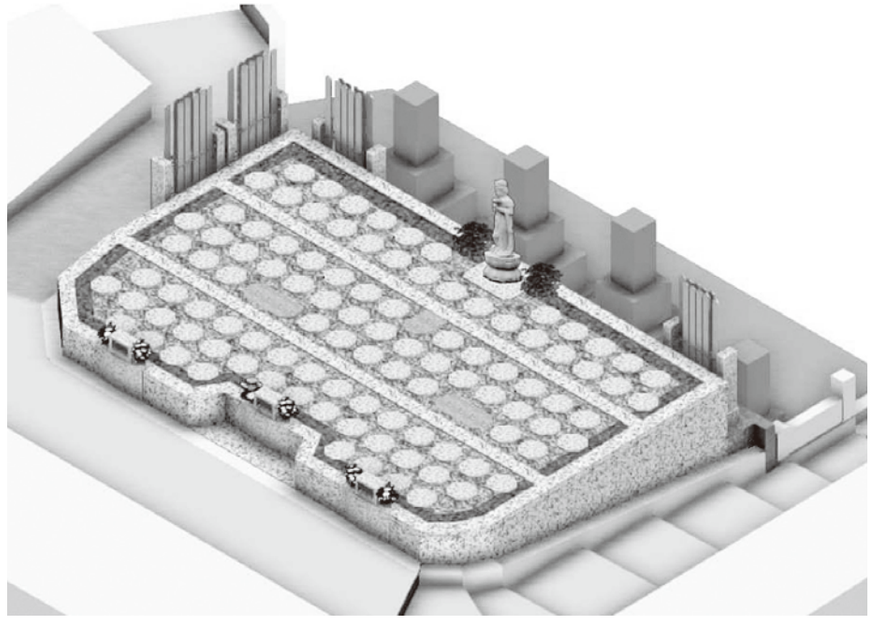
「当山の樹木葬は、宗旨宗派を問わずにお申し込みできるので、基本的に檀家になる必要がありません。また最近は火葬場で直葬するケースが増えており、これまでお寺とご縁のなかっ

た方も多くおられます。本来なら通夜や葬儀で故人様のことを思い出しながら自分の素直な気持ち（感謝や反省の念など）を伝えて心を浄化すべきなのですが、それができていない方も多いので、納骨の際は、ご遺族や参列者の皆さんに、そのときの想いや感情を今一度思い出してお別れするようにお話しています。そうすることで気持ちに整理がつき、深い悲しみや嘆きを少しずつ緩和させることができます。納骨はそういうグリーフケアの大切な機会でもあります。こうしてご供養のことから心のケアまでお寺としてお話しできるのも、お寺にある樹木葬だからこそ可能なのです。千代石さんには本当に感謝しております。したがって、檀家ではない信徒の皆さんに対しても、ご依頼があれば、お寺としての仕事（追善供養や厄除けなど）もできるだけ丁寧に営んでいくつもりです」

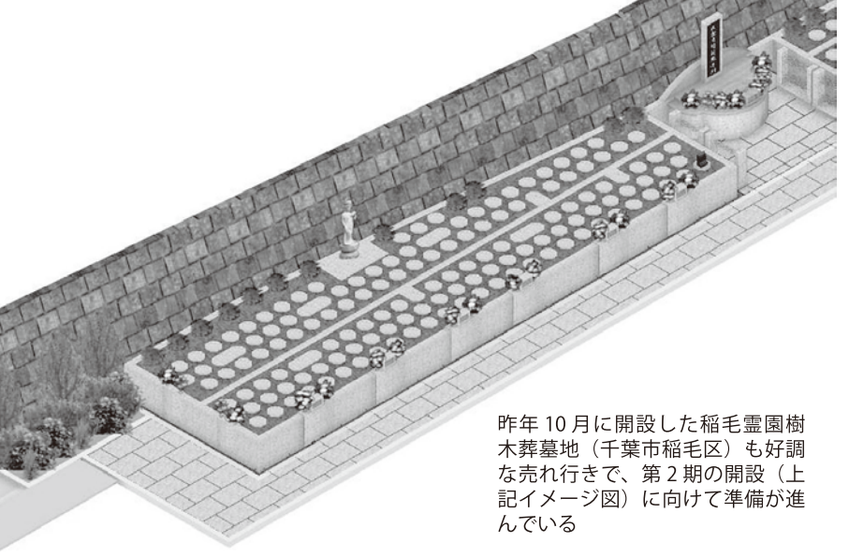
神住職はそう話す。

今後は合同法要を定期的に実施していく予定だが、今年八月に新盆会を開催したところ、これまでにない大人数の参列者があり大盛況だった。前述の供養スペースにも数多くの塔婆が上げられていた。

なお千代石の骨壷納骨型樹木葬墓地は、地元神奈川では今回取材した鎌倉材木座（第一期完売、第二期）のほか、横浜慶珊（けいさん）寺（第一～二期完売、第三期準備中）、横須賀衣笠（第三期）、湘南茅ヶ崎（第二期）、清水ヶ丘霊園などで販売実績を順調に伸ばしており、県外では千葉県の野田（第二期）、稲毛霊園（第一期が完売間近、第二期に着手）でも好評販売中。同社が供養重視の視点で考案・設計した骨壷納骨型樹木葬墓地はいずれも快進撃を続けており、その勢いはこれからもしばらく続きそうだ。



骨壷納骨型墓地構造を初めて採用した「横浜慶珊寺樹木葬墓地」（横浜市金沢区）は、すでに第一～二期（下二点）は完売となり、第三期目の準備（右記イメージ図）が進んでいる



昨年10月に開設した稲毛霊園樹木葬墓地（千葉市稲毛区）も好調な売れ行きで、第2期の開設（上記イメージ図）に向けて準備が進んでいる

数多くの墓石が建ち完売間近となった稲毛霊園樹木葬墓地の第1期区画

横須賀衣笠樹木葬墓地は、特許を取得した骨壷納骨型墓地構造を第3期販売分（写真上）から採用している

※同社の骨壷納骨型樹木葬に関する記事は、本誌の昨年2月号及び4月号、6月号、10月号に続いて、今年2月号でも取り上げているので、詳細について知りたい方はぜひ再読してください

◎千代石㈱・本社
神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-6-15
桜ビル906
TEL045-620-8424
https://www.chiyoseki.jp/

※口絵6～7頁に同社カラー広告を掲載中

◎鎌倉材木座樹木葬墓地（日蓮宗、妙長寺）
神奈川県鎌倉市材木座2-7-41